伊勢物語

梓弓

昔、男、片田舎に住みけり。男、宮仕へしにとて、別れ惜しみて行きにけるままに、[1]三年来ざりければ、待ちわびたりけるに、いとねむごろに言ひける人に、「今宵あはむ。」と契りたりけるに、この男来たりけり。「この戸開け給へ。」とたたきけれど、開けで、歌をなむ詠みて出だしたりける。

[2]あらたまの年の三年を待ちわびてただ今宵こそ[3]新枕すれ

と言ひ出だしたりければ、

[4]梓弓真弓槻弓年を経てわがせしがごとう[5]るはしみせよ

と言ひて、往なむとしければ、女、

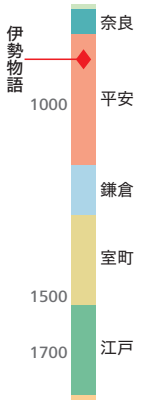
[6]梓弓引けど引かねど昔より心は君に寄りにしものを

と言ひけれど、男帰りにけり。女いと悲しくて、後に立ちて追ひ行けど、え追ひつかで、清水のある所に伏しにけり。そこなりける岩に、指の血して書きつけける。

[7]あひ思はで離れぬる人をとどめかねわが身は今ぞ消え果てぬめる

と書きて、そこにいたづらになりにけり。

（第二四段）



1三年来ざりければ　夫が他国に行ったまま、三年にもわたり消息不明であれば、妻は再婚してもかまわないという慣習によったものか。「令」の規定によったとする説もある。

2あらたまの　「年」に係る枕詞。

3新枕　男女が初めて共寝して夫婦の契りを結ぶこと。

4梓弓真弓槻弓　「年」を導く序詞。梓・檀・槻は弓の材料となった木。

5うるはしみせよ　親しみ愛してくださいよ。

6梓弓引けど引かねど　「梓弓」は「引く」に係る枕詞。「引く」は、ここでは男が女の心を引くこと。「引く」「寄る」は「弓」の縁語。

7あひ思はで　お互いに思いを寄せ合うことができないで。ここでは、私が思いを寄せているのにあなたは思ってくれないで、の意。